



TITLE:

<研究論文(原著論文)>クリプキの「信念のパズル」に対する批判 -- 「通常」という概念をめぐる--

AUTHOR(S):

山口, 尚

CITATION:

山口, 尚. <研究論文(原著論文)>クリプキの「信念のパズル」に対する批判 -- 「通常」という概念をめぐる-- . Contemporary and Applied Philosophy 2012, 4: 35-64

ISSUE DATE:

2012-10-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/180275>

RIGHT:

クリプキの「信念のパズル」に対する批判

——「通常」という概念をめぐる*

山口尚

概要

In this paper, I suggest that, since Kripke's Puzzle about Belief involves a tendentious conception of the terms "normal," "standard" or alike, it cannot be qualified as a genuine philosophical puzzle that every philosopher should attempt to solve.

First, I explain the historical background of and appropriately reformulate the Puzzle about Belief. Next, I overview existing solutions and introduce the details of some of them. However, I suggest that Kripke would not admit that any of these "solutions" really solve the Puzzle, because, according to him, none of the existing proposals would be consistent with the "normal" practice of belief ascription (e.g., Kripke would reject some solutions because they violate the Translation Principle that the "standard" speakers must obey). I argue that Kripke's view involves a commitment toward a biased use of terms like "normal" or "standard." Therefore, if we refute his conception of "normal" or "standard" in an appropriate way, we can avoid the Puzzle about Belief.

Keywords: クリップキ, 信念, 信念のパズル

はじめに

本稿はいわゆる「信念のパズル」を論じる。クリプキは、ある論文(Kripke 1979)において、信念帰属文にまつわるパズルを提示した。私はこのパズルに関するクリプキの立場を批判したい。それは、表題でも示

* CAP Vol. 4 (2012-2013) pp. 35-64. 受理日: 2012.5.8 採用日: 2012.9.28 採用カテゴリ: 研究論文(原著論文) 掲載日: 2012.10.25.

唆したように、「通常性 normality」なるものに対するクリプキのスタンスへの批判である。具体的に言えば以下である。私たちは日常生活において「〇〇氏は……と信じる」という形式の信念帰属文(以下、単純に「信念文 belief sentence」)を用いて他者へ特定の信念を帰すことがある。クリプキはこうした信念帰属の実践の通常¹の原理がパズルを生み出すと主張した。とはいえクリプキが依拠する「通常性」概念には問題点がある。それゆえ——パズルが依拠する「通常性」という基盤が堅固でないのであるから——「信念のパズル」はパズルとして成立しない。かくして次のように言われうる。クリプキはパズルならざるものを「パズルだ」と騒ぎ立てているにすぎなかった、と。

本稿の議論は以下の順序で進む。まずパズルのバックグラウンドを説明する(第 1 節)。次にパズルを定式化する(第 2 節)。そして、現在までの論争の状況を鳥瞰し(第 3 節)、有力な解決案を紹介する(第 4 節)。しかし——これが本稿の指摘のひとつだが——こうした解決案はどれもクリプキを満足させるものではない。その理由は、クリプキによれば、それらの解決案がどれも通常²の信念帰属実践と折り合わないからである。私はパズルへの既存の解決案がどれも日常実践と齟齬をきたすとクリプキが主張するだろうことを指摘したい(第 5 節)。とはいえ——これが本稿において最も強調したい点だが——私はクリプキの応答が「通常性」概念への問題的な依拠をはらむ点を指摘する(第 6 節)。

本稿の議論全体に関する注意を述べておく。本稿の前半では私自身の意見を差し控えて叙述する。すなわち、第 1 節から第 4 節においては、信念のパズルをめぐる論戦の状況をできる限り客観的に記述したい。第 5 節ではクリプキの立場を私なりに解釈する。そこでは、できるだけクリプキの意に沿った解釈を与えるよう努める(言い換えれば、クリプキ自身も私の解釈へ同意してくれることを意図して、議論を展開する)。とはいえ、このことは、第 5 節がクリプキの立場の「一般的に受け入れられた」解釈を与えることをかならずしも意味しない。なぜなら——すぐ後でも述べるように——クリプキの意に沿った解釈は、これまで明示的に提示されたことがない、というのが私の考えだからである。第 6 節では私自身の意見が述べられる。そこでは、クリプキの立場を離れて、私自身のクリプキ批判を展開する。

本論へ進むに先立ち、本稿の主張の哲学的意義を説明しておきたい。

クリプキの論文が公刊された 1979 年からすでに 30 年以上経ち、彼のパズルに関する論争の基軸であった「ミル主義とフレーゲ主義の対立」(後述)も現在の言語哲学の最も重要な関心事とは言えなくなってしまう。それゆえ、なぜ今さら信念のパズルを論じるのかについて、釈明する必要があるだろう。私は、次の点において、信念のパズルを論じることが現在でも意義をもつと考えている。それは、過去 30 年余において信念のパズルに対する多くの解決案が提示されたが、それらはどれも、パズルを提示する際のクリプキの周到なロジックを十分に考慮していない、という点である。そして——次の点が核心的だが——そのクリプキの周到なロジックは、もしその内部に問題点が見出されないのであれば、既存の解決案をまとめて棄却する威力をもっている(この点は本稿の第 5 節で確認される)。それゆえ、信念のパズルを解決したいのであれば、このクリプキのロジックを正確に捉え、その妥当性を検討する必要がある。本稿はこの作業にとりくむ。

加えて、次の点にも簡単に触れておこう。本稿の議論は、パズルをめぐるこれまでの論戦へ新たに何を

つけ加えたのか。

本稿の議論に独自の点があるとすれば、それは第一に、第 5 節におけるクリプキ解釈である。私の知る限り、「信念のパズル」が「通常の normal」や「標準的 standard」を本質的な鍵概念としていると明示的に指摘した論者はいない。あるいは、少なくとも、クリプキがこうした概念を活用して先述の「周到的ロジック」を組み立てるさまをテキストに即して再構成した論者はいない。しかし——本稿の後半で強調されることだが——信念のパズルが「通常性」を鍵概念とする点を確認することは、次のふたつの理由で重要である。第一に、この点を確認することは、《信念のパズルとは、結局、何であったのか》へ答えるための決定的な一歩となる（この問いへの答えは本稿の第 5 節の最後に提示される）。第二に、その点を確認することは、クリプキの議論を批判するための核心的な一歩となる。実に、本稿の第 6 節で展開されるクリプキ批判も、信念のパズルが「通常性」概念に依拠するというクリプキ解釈にもとづいている。それゆえ、仮に本稿のクリプキ批判に新しさがあるとすれば、それは第 5 節の作業に依拠していると言える（こうした点は結論部であらためてとりあげたい）。

1 歴史的背景

本節ではパズルのバックグラウンドを紹介する^{*1}。その背景とは、ひとことで言えば、「ミル主義とフレーゲ主義の対立」である。ただし、紹介に先立って、ひとつ注意がある。それはクリプキが、「パズルを定式化するためにこの背景が必要だということはけっしてない」^{*2}と述べる点である（Kripke 1979: 239 強調は原著者）という点である。私はこの指摘が重要だと考える。本稿の後半で指摘するように、クリプキは信念のパズルが「ミル主義とフレーゲ主義の対立」という領界を超え出ていると考えている。そして、彼によれば、信念のパズルを《ミル対フレーゲ》の争点のひとつとしないことが、このパズルを理解する正しい仕方である。他方で、この点を説明するためにも、バックグラウンドをある程度紹介しておく必要がある。以下、パズルの背景を必要な限りで押さえたい。

1970 年代以降、固有名の意味と指示をめぐって「フレーゲ主義 Fregeanism」と「ミル主義 Millianism」が対立している。前者の内実は (F) によって、後者のそれは (M) によって表現される。

(F) 固有名はフレーゲの「意義 Sinn」と「指示対象 Bedeutung」に相当する二種類の意味を有する。

(M) 固有名は指示対象という一種類の意味しか有さない。

クリプキは論文「名指しと必然性」(Kripke 1972)においてフレーゲ主義を批判しミル主義を擁護した。だが、彼の周到的攻撃にもかかわらず、クリプキに対する有力な反論が残っていた。その反論はフレーゲ主義を支持しミル主義を否認する。その論証は以下である。

^{*1} これについては Kripke 1979: 239-248 を参照した。

^{*2} 本稿の引用は基本的に私自身の訳によるが、Kripke 1979 に関しては次の信原氏の訳をおおいに参考した。ソール・A・クリプキ「信念のパズル」信原幸弘訳・解説、『現代思想』、1989 年、3 月号。

反論者は次の(1)から(4)が同時に真でありうると主張する。ここで「合理的 rational」という形容詞は《矛盾した信念を受け入れない》という意味で理解されたい。

- (1) ジョーンズはキケロがはげであったと信じる。
- (2) ジョーンズはタリーがはげでなかったと信じる。
- (3) キケロとタリーは同一人物である。
- (4) ジョーンズは合理的な人物である。

(1)から(4)の連言を簡単のため JCT と呼ぼう (Jones-Cicero-Tully の略である)。JCT は真でありうると思われる。例えばジョーンズは、たとえ論理的な人物であっても、瑕疵のある情報に惑わされれば、キケロがはげであると信じつつタリーがはげでないと信じることがある。

JCT が真である可能性は、フレーゲ主義を後押しし、ミル主義を不利な状況へ追い込む——と反論者は主張する。その議論は以下である。

まず、曰く、JCT が真である可能性はフレーゲ主義によって説明される。フレーゲ主義のテーゼ(F)が正しいと仮定し、「ジョーンズは……と信じる」における「……」の位置に現れる固有名が、指示対象を意味するのはなく、意義を意味すると前提する。すると、仮に(4)が真であっても、(1)の「キケロ」はジョーンズにとっての「キケロ」の意義を意味し、(2)の「タリー」はジョーンズにとっての「タリー」の意義を意味する。これらのふたつの意義が異なったものである場合、(1)と(2)におけるジョーンズの信念は矛盾しない。それゆえ、(1)と(2)と(4)が真であっても、(3)は真でありうる。

他方で、曰く、ミル主義は JCT が真である可能性を説明しえない。重要なことはミル主義のテーゼ(M)が次の(S)で表現される全般的な「代入可能性 substitutivity」のテーゼを含意する点である(「全般的」の内実はあとであらためて説明する)。

- (S) 固有名 $n1$ と $n2$ が同じ指示対象を有する場合、文 $S1$ における $n1$ の現れを $n2$ で置き換えて得られる文を $S2$ とすると、 $S1$ と $S2$ は同値である。

(S)は、JCT が真である状況において、背理を導出する。その理屈は以下である。まず(3)と(S)から「タリー」が「キケロ」へ常に置き換え可能であることが帰結する。それゆえ(2)から(5)が導出される。

- (5) ジョーンズはキケロがはげでなかったと信じる。

ここで(1)におけるジョーンズの信念と(5)におけるそれは矛盾する。これは(4)に反す。よって背理である。このことは次を意味する。すなわち、(S)が正しいときには JCT は真でありえない、と。

以上より次の骨格を有する反ミル主義的論証が主張される。

前提1 JCT は真でありうる。

前提2 (M)は(S)を含意する。

前提3 (S)は JCT が真でありえないことを含意する。

∴結論 (M)は真でない。

クリプキはミル主義者である。それゆえ彼はこの論証をブロックしなければならない。そして、この論証をブロックするという文脈で、「信念のパズル」は提示された。信念のパズルとは、歴史的には、ジョーンズの事例による反ミル主義的論証へ応答するために定式化されたパズルである。

以上がバックグラウンドであった。要点をまとめよう。ミル主義は固有名の全般的な代入可能性の原理(S)を含意する。「全般的な」というのは(S)が任意の「文脈」における固有名へ適用可能であることを意味し、とくに「〇〇氏は……と信じる」における「……」という信念文脈に表れる名前へも適用可能であることを意味する(フレーゲ主義はこの種の代入可能性をけっして認めない)。ここでクリプキの批判者は次のように言う。すなわち、(S)はジョーンズの事例において背理を生むのだから、このことはミル主義の間違いを示すのではないかと。信念のパズルはこの理屈へ抗するために提示された。かくして、ミル主義に対する「信念」概念を用いた批判からミル主義を守ること——これがクリプキの「信念のパズル」の歴史的な動機である(「歴史的な」を強調するのは、繰り返す述べるように、クリプキはパズルそのものが目下の文脈を超えた射程をもつと考えるからである)。

2 思考実験とパズル

本節では信念のパズルを定式化する。以下の順序で叙述したい。はじめに、パズルを組み立てる際に用いられる一般的原理を確認する。これは同意、信念、翻訳に関する一般的原理である。次に、ピエールという人物に関する「思考実験的な」状況を紹介し、パズルを提示する。その後で先の反ミル主義的論証に対するクリプキの反論を確認したい。

はじめに一般的原理である。クリプキは二種類のものを用いる。一方は「引用解除原理 *disquotational principle*」と呼ばれ^{*3}、他方は「翻訳原理 *principle of translation*」と呼ばれる。ひとつずつ確認しよう。

引用解除原理は次の(D)で表される(ここで *S* は指標表現、代名詞、曖昧な語を含まない日本語の文である)^{*4}。

(D) 通常の日本語話者が熟慮のうえで誠実に「*S*」へ同意するならば、彼は *S* と信じる。

^{*3} 引用解除原理には弱いヴァージョンと強いヴァージョンがあるが、紙幅の都合上、後者については本稿では触れない。

^{*4} Kripke 1979: 248-249 を参照せよ。

「通常の normal」、「熟慮のうえで on reflection」、「誠実に sincerely」などの制限は、各々、引用解除が明白に可能でないケースを除外するために付帯されている^{*5}。「通常」というのはいささか分かりづらいが——加えて、後で説明するように、この「通常性 normality」が論文「信念のパズル」の鍵概念であると思われるが——クリプキによれば、「通常の日本語話者とは、文に現れるすべての語を標準的な仕方で用いて、それらの語を適切な文法規則に従って組み合わせるひと」である (Kripke 1979: 249)。(D)を具体的に適用すれば以下である。例えば、九鬼周造は文「ニーチェは『ツァラトゥストラ』の一部をニースとマントーンで書いた」へ同意しているが^{*6}、ここから私たちは(D)を用いて九鬼周造がニーチェは『ツァラトゥストラ』の一部をニースとマントーンで書いたと信じていると結論しうる。ちなみに(D)は日本語に関する引用解除原理である。パズルの提示にはフランス語に関する引用解除原理も必要になる。これを(D#)とおこう。

翻訳原理は次の(T)によって表現される (Kripke 1979: 250)。

(T) *S* をある言語 *L1* の文とする。このとき *S* が *L1* において真理を表現するならば、*S* を他の言語 *L2* へ翻訳して得られる文も *L2* において真理を表現する。

具体的に適用すれば、例えば、‘Dieu existe’がフランス語において真理を表現するならば、その翻訳である「神は存在する」も日本語において真理を表現する、という具合である。

(D)や(T)は妥当な原理だろうか。この点についてクリプキは次のように論じる。たしかにどちらの原理にも反例のようなものがある(例えば、翻訳において、真理性の保存ではなく文学的効果の保存が重視される場合には、(T)は必ずしも成立しない)。とはいえ、曰く、これらの原理は「その明白な意図どおりに理解されるならば、自明の真理 self-evident truth であるように思われる」(Kripke 1979: 249, and cf. 263)。もちろんこの点でクリプキに同意しない論者もいる——その議論については第4節で確認したい。

次に「思考実験的」状況とパズルである^{*7}。ある男性——ピエールという——が2001年にフランスで生活しているとしよう。彼は外国語をまったく話せないフランス語話者である。その当時ピエールは海外へ一度も行ったことはなかった。だが彼は書物や会話を通じて遠くの街ロンドンについて多くのことを知る(ピエールはロンドンのことを‘Londres’と呼ぶ)。まもなくピエールはフランス語で‘Londres est jolie’と述べるようになる。その後ピエールは、困窮と職探しのため、自分がどこに住んでいるのかも分らない状態でさまざまな国を転々とする。2011年にピエールはある街のある地区へたどり着いた。実は——これはピエールの知らないことであるが——彼はロンドンの知られざる劣悪な日本人町にいる。以後ピエールはこの日本人町から足を踏み出すことはない。彼はその土地の言葉を知らない。彼は直接的な経験を通じて言葉を学ぶ。ピエールは、隣人たちと同様に、自分が住む街を日本語で「ロンドン」と呼ぶようになる。そしてピエールは経験を通じて自分が住む街について多くのことを知り、いつしか日本語で「ロンドンは美しくない」と

^{*5} 本文の以下の箇所では話者はすべて通常の話者とし、同意はすべて熟慮のうえで誠実に行われると仮定する。

^{*6} 九鬼周造『エッセイ・文学概論』大橋良介編、燈影舎、2003年、6頁。

^{*7} クリプキ自身の例へ本質的でない変更を施した。また、もうひとつの有名な事例——いわゆるパデレフスキの事例——は、紙幅の都合上、省略したい。

言うようになる。

加えて次の事実が成立しているとしよう。それはピエールが合理的であるという事実である。かくして次の(6)から(8)が真であることになる。

(6) Pierre donne son assentiment à ‘Londres est jolie’.

(7) ピエールは「ロンドンが美しい」へ同意する。

(8) ピエールは合理的な人物である。

これらの連言を簡単のため PLL と呼びたい (Pierre-Londres-London の略である)。また PLL を真にする上記のストーリーを「ピエール状況」と呼ぼう^{*8}。

ここからクリプキは次のように主張する。PLL は (D)、(D#) と (T) から背理を導出する。その理屈は以下である。PLL が真であると仮定しよう。すると(6)から(D#)によって(9)が帰結し、(9)から(T)を通じて(10)が導出される。

(9) Pierre croit que Londres est jolie.

(10) ピエールはロンドンが美しいと信じる。

他方で(7)は(D)によって(11)を帰結する。

(11) ピエールはロンドンが美しいと信じる。

ここで(10)と(11)は(8)に反す。よって背理である。

要点をまとめよう。「ピエール状況」は生じうる事態である。それゆえ PLL は真でありうる。また (D)、(D#) と (T) は正しい原理に見える。だがこれらの原理は PLL から背理を導出した。この背理の原因はなにか。ここから以下の問いが生じる。

- ・ 引用解除原理と翻訳原理が正しいとすれば、私たちはピエールの状況をどう記述すればよいのか。つまりピエールはロンドンが美しいと信じているのか、信じていないのか。
- ・ あるいは、引用解除原理や翻訳原理などの一般的原理が正しくないとするれば、私たちは新たにどのような原理を定式化すればよいのか。

これらの問いが「信念のパズル」である (Kripke 1979: 259)。

^{*8} ピエール状況そのものと、この状況から生じると思われるパズルを区別することは重要である。なぜならピエール状況を、パズルを引き起こさない仕方でも記述することが可能であるかもしれないからである(そして、後で述べるように、私は「可能だ」と考える)。

他方で、クリプキによれば、このパズルは同時に先の反ミル主義的論証をブロックする。その理屈は以下である。「ピエール状況」は(S)を用いずに背理を導出した。他方で、クリプキによると、ジョーンズの背理とピエールの背理は同種である。というのもジョーンズの状況とピエールの状況は「よく似ている」からである^{*9}(Kripke 1979: 267)。したがって反ミル主義的論証が(S)へ帰したジョーンズの背理は別のところに原因をもつ。つまりJCTから矛盾を導出した「真犯人」は(S)や(M)ではなかったのである。

この議論への反論は次節以降で紹介する。先にクリプキの見解を総括しておきたい。まず「信念のパズル」へクリプキ自身はどう応答するか。その答えは「分からない」である。クリプキは解決案を述べない。クリプキ曰く、「私はそれをどのように解けばよいかははっきり分からない」(Kripke 1979: 259)。むしろクリプキの主張は以下である。ミル主義(に基づく固有名の代入則)は信念に関して背理を生むと考えられてきた。だがこうした背理は、ミル主義にではなく、むしろ同意、信念、翻訳などに関わる諸概念に根をもつ。そして、今のところ——つまりクリプキが論文を執筆した1970年代後半——この背理を回避するよい方法は見つかっていない。それゆえミル主義と固有名の代入可能性について、肯定的であれ否定的であれ、何らかの判断を下すのは時期尚早である。

以上が「信念のパズル」とそれに関するクリプキの考えであった。次節とその次の節ではパズルの解決案を確認したい。ただし、先ず的に言えば、それらはどれもクリプキを満足させない。なぜならそれらは「通常性」というファクターへ十分に配慮しないからである。この点は第5節で指摘したい。

3 パズルへの応答の見取り図

本節は論戦の鳥瞰的な見取り図を与える。ただし議論は錯綜しており単純な基準ですべての見解を分類・整理することは困難である。また各々の見解の抽象化や単純化も避けられない。あらかじめ断っておきたい。

はじめに極端な立場を挙げる。一方の極にはいまだパズルへ妥当な解決が与えられていないとする見解がある(Corlett 1989, Frances 1998)。つまり、いまだに「パズルはパズルである」(Kripke 1979: 239)ということである。他方の極にはクリプキのパズルなど実は存在しないとする見解がある(Laurier 1986)^{*10}。もちろん大半の論者はパズルをパズルと認め、それに解決を与える(パズルを解消するという意味の「解決」も含まれる)。これらの「解決」はピエールの背理の原因をどこに置くかに応じて分類される。

第一の立場は背理の導出に用いられた一般的原理を問題視する。例えば、矛盾した文への同意には引用解除原理が適用できないとする見解(Marcus 1981)やピエール状況において「Londres」を「ロンドン」と翻訳することへ疑義を投げかける見解(Over 1983)がある。加えて、信念内容とそれを表現する言語の関係を密接なものとし、ピエールの事例で翻訳原理が不当に適用されているとする見解(Hanna

^{*9} ジョーンズの背理とピエールの背理の「並行関係」はめったに疑問視されない(その根拠が薄弱でありうるにもかかわらず)。これを疑問視する数少ない例はLoar 1986である。

^{*10} ローリエはミル主義に従うと固有名を埋め込んだ言表的信念などありえないと主張する。そして彼はピエールのパズルがクワインの事象的信念のパズルへ吸収されると述べる(Laurier 1986: 43)。

2001)もある。

第二の立場は信念文の解釈を再考する。この立場は「〇〇氏は……と信じる」の「……」を文字どおりに解釈することを拒否し、ピエールへ矛盾した信念を帰することを回避する(Lewis 1981, Lewis 1986, Loar 1987, Loar 1988, Lewis 1994)。あるいは、名前そのものと一定の文(とりわけ文構造)におけるその現れを区別することによって同じ名前へ異なる割り当てをあてがうことを可能にし、それによって背理を回避する立場もある(Fiengo and May 1998)。

第三の立場は「合理性」概念を問題視する。この立場は、さまざまな理由で、合理的なひとが矛盾を信じうると主張する(Pettit 1984, Lumsden 1984, Salmon 1986, Lycan 1988, Devitt 1990, Owens 1990, Brown 1992, Feit 2001)。ちなみに、拙稿である山口 2009 はこの路線の解決案を提案した。

第四の立場はクリプキの「信念」概念そのものを問題視する。クリプキは《信念が主体に帰属する具体的な認知構造であり、これには対象を表象する思念 notion などが関連する》という事態を重視しない。これが背理の原因である——と考える論者がいる。例えば、ピエールがロンドンについて二種類の思念——いわば Londres - 思念とロンドン - 思念——を有すると想定すれば、背理は回避されと言われる(Crimmins and Perry 1988)。またクリプキの「信念」概念には文脈主義的な要素や全体論的な要素がない。これが背理の原因である——と考える論者もいる。例えば、ある論者は信念報告文の真偽を文脈に相対化すれば背理は生じないと主張し(Bach 1997, Moore 1999)、別の論者は全体論的な視点によって問題的な引用解除や翻訳をブロックしうると考える(Marcus 1983, Santambrogio 2002)。また「文脈」と「全体論」の概念を併用するのがベストであると述べる論者もいる(Taschek 1998)。加えて、「……と信じる」をいわば「排中律的な」述語と見なさないことによって「ピエールはロンドンが美しいと信じているのか、いないのか」という問いへの肯定の回答と否定の回答をともに退ける論者もいる(Powell 2011)。

第五の立場はミル主義を問題視する。この立場は、ピエールの背理が(S)や(M)なしで導出されうるというクリプキの議論に納得せず、背理の根源にはミル主義的発想がひそんでいると考える(Taschek 1988, Sosa 1996)。この立場にはフレーゲ主義の採用によって背理を回避しうると考える論者もいる。例えば、適切な意義理論を構築することによってピエールの信念が整合的に記述されうると主張する者(McMichael 1987, Forbes 1990, Katz 1994)や、ミル主義が「文脈」概念を用いて背理を逃れうる点を認めつつも「文脈」概念を必要としないフレーゲ主義の優位性を指摘する論者もいる(Kallestrup 2003)。

第六の立場は背理の原因が意味や指示の問題圏に存在しないと主張する。これはドネランの主張である(Donnellan 1990)。ドネランはクリプキのパズルが、本質的には、指示の理論と関係しないと主張する。そしてドネランはこのパズルが「テセウスの船 the ship of Theseus」などの同一性と持続の問題と同類であると言う。ちなみにこの見解にはフォーブズが反論している(Forbes 1994)。

次節では解決案の具体的事例として四つの立場を確認したい。第一と第二はそれぞれマーカスの見解とオーヴァーの見解であり(選んだ理由は初期の反論として見るべき価値があるからである)、第三はルイスの見解であり(選んだ理由は、明晰な解決案だが、あまり知られていないと思われるからである)、第四はサーモンの見解である(選んだ理由は有名だからである)。加えて、ドネランの立場も紹介したい。ドネランは最終的にクリプキを擁護するのだが、彼の議論には見るべき点が多いと思われる。そして、第 5

節でとりあげるクリプキの応答はドネランの立場とおおいに関係する。

4 解決案の具体例

本節では前節の末尾で挙げた解決案(およびドネランの立場)を紹介する。クリプキはどの解決案にも満足しないと思われるが、その点については次節以降で論じたい。本節はもっぱら各見解の内容の紹介と説明に努めたい。

4.1 マーカスの見解

マーカスは引用解除原理の制限を提案する(この制限によって背理の発生を防ごうとする)。曰く、引用解除はすべての同意へ適用可能であるわけではない。引用解除原理を制限する根拠として彼女が挙げるのは、信念に関して彼女が有する「直感」^{*11}である(Marcus 1981: 505)。この直感を彼女は以下のように説明する。

例えばX氏が次のように主張したとする。すなわち、自分はヘスペラスがフォスフォラスと同一でないと信じている、と。この場合、ヘスペラスとフォスフォラスが同一であることをX氏が発見した場合、彼は自らの信念についてどう考えるべきか。マーカスによれば、次のように考えるべきでない。すなわち、彼はかつてヘスペラスがフォスフォラスと同一でないと誤って信じていたが、今やその間違った信念を新たな信念に置き換える、と。なぜか。理由は次である。すなわち、ヘスペラスとフォスフォラスが同一である場合、仮にX氏が《ヘスペラスとフォスフォラスが同一でない》と信じていたとしたら、彼は《あるものがそれ自身と同一でない》と信じていたことになる——しかし、このことは彼が信じていたことでない、と。実際、彼には《 $a = a$ 》という同一性言明を疑う意図はなかったはずである。マーカスによれば、この種の矛盾した事態はけっして信じられえない。では、X氏の間違いはどこにあるのか。マーカスは次のように説明する。すなわち、X氏が自分はそうした信念を有すると主張していたことが間違いだった、と。要するに、彼は自分が信じていないことを信じていると言った点で間違っただけである。

以上の直感にもとづき。マーカスは信念へ次の制約をおく(Marcus 1981: 505)。「もし x が p と信じているならば、 p は可能である」そして、この制約をふまえて、引用解除原理を次のように修正する。

すべての同意は誠実かつ熟慮のうえで行われるとする。このとき、もし(1)通常の日本語話者が「 S 」へ同意し、(2)「 S 」が日本語の文であり、(3) S が可能であるならば、このときには彼は S と信じる。(Marcus 1981: 505 傍点強調は引用者による)

こうした引用解除原理を採用すれば、ピエールの事例は背理を生まない。なぜなら——直感的に分かるように——ピエールの同意へは引用解除が適用できないからである^{*12}。

^{*11} マーカス自身が「直感 intuition」という言葉を用いている。

^{*12} マーカスは具体的には以下のように論じる。まずピエールは次の日仏混合文へ同意する(実際にマーカスが扱うの

要するにマーカスの解決案は次である。クリプキの引用解除原理は必要な制限を欠いている。そして、必要な制限を加えれば、パズルは生じない。

4.2 オーヴァーの見解

D・E・オーヴァーはクリプキが翻訳原理を「誤用している misuse」と主張する(Over 1983: 253)——そして、この誤用こそが背理の原因であると主張する。オーヴァーによれば、固有名の使用には翻訳可能でないケースがある。彼はこの点を以下の事例でサポートする(Over 1983: 253-254)。

例えば、ピエールがロンドンからパリへ一時的に帰省し、その後、海峡トンネルを通してロンドンへ戻るとする。加えて、ロンドン駅にはフランスからの訪問者のために「Londres」と表示してあるとする。ここで^{*13}、ピエールは帰路の電車で眠ってしまった。眠りから目覚め、窓の外をみると、「Londres」と書かれた駅名表示が見える。ここでピエールは日本語で次のようにつぶやく。「ああ、ここが Londres であるのか。ずっとどこあるのか考えていたのだが。残念ながら、寄っていく時間はないな。早くロンドンへ帰らないといけなのだから」ここでオーヴァーは以下のように主張する。ピエールの発言の一文目へ引用解除原理を適用した後、「Londres」を「ロンドン」と翻訳すると次が得られる。

ピエールはここがロンドンであると信じている。

しかし、オーヴァーによれば、これは偽である。なぜなら、曰く、ピエールはここがロンドンではなく、Londres であると信じているからである。

かくして、オーヴァーによれば、ピエールの「Londres」は「ロンドン」へ翻訳可能でない。だが、そうであるならば、私たちはピエールの信念をどのように表現すればよいのか(というのも日本語の「ロンドン」だけでピエールの信念は表現しきれないため)。オーヴァーは以下のように提案する(Over 1983: 254-255)。ピエールが日本語を学んだ後、彼のいわゆる個人方言は日本語とフランス語というふたつの部分言語から成る。そして、こうした「二言語的」個人方言に対しては通常の翻訳マニュアルが適用できない。では、どうすればよいのか。オーヴァーによれば、私たちのできることはせいぜい、「Londres」を私たちの言語を導入して、次のように表現することである。

ピエールは Londres が美しいと信じているが、彼はロンドンが美しくないと信じている。

これは、いわゆる「混合言語 mixed language」によってピエールの信念を表現する、というやり方である。

オーヴァーの解決案は次である。固有名(あるいはその他の表現)の使用には翻訳可能でないものがある。「クリプキは、すべてのひとの「Londres」の使用が「ロンドン」へ翻訳可能であると考えることによって、

は英仏混合文だが)。「ロンドン」は Londres と同一でない」さて、この文に対する同意から信念へ移行することはできない。なぜならこの文で表現されている事態は可能でないからである。

^{*13} この設定は私による追加である(話を分かりやすくするため)。

翻訳原理の適用を失敗している」(Over 1983: 253)。そして翻訳原理を適切に使用すればパズルは生じない。

4.3 ルイスの見解

ルイスはピエールの事例の教訓を次のように理解する。すなわち、信念文「ピエールは……と信じる」における「……」はピエールの信念内容を表現しない、と。この点に留意すれば、ピエールの事例を整合的に分析することは可能である。——こうした点をルイスは段階を踏んで説明する。

第一にルイスは「信念のパズル」を次のように定式化する(Lewis 1981: 408)。すなわち、次の(a)と(b)と(c)が同時に真でありうることをどのように説明するか、と。

- (a) ピエールはロンドンが美しいと信じている。
- (b) ピエールはロンドンが美しくないと信じている。
- (c) ピエールへ矛盾した信念を帰すことはできない。

ルイスは引用解除原理や翻訳原理を疑わない。ルイスは(a)と(b)と(c)が同時に真でありうることを認める。かくしてルイスにとってパズルは《いかにしてこれを説明するか》となる。

第二にルイスは(a)と(b)の「自然で分かりやすい分析」が事態を説明できないこと(そして、むしろパズルの原因となっていること)を指摘する(Lewis 1981: 410)。この「自然で分かりやすい分析」とは次の三つの部分から成る。

- (d) 「A」を通常の固有名、「F」を述語とすると、文「ピエールは F(A)と信じる」はピエールへ「F(A)」によって(現実^{*14})表現される命題を対象とする信念を帰属する。
- (e) この命題——「F(A)」によって(現実^{*})表現される命題——が真となる可能世界は、「A」によって(現実^{*})指示される物が、「F」によって(現実^{*})表現される性質を有している可能世界である。
- (f) ふたつの信念 b1 と b2 が矛盾的であるのは、b1 の対象である命題と b2 の対象である命題がともに真となる可能世界が存在しない場合である。

この分析を前提すれば、先の(a)と(b)はピエールへ矛盾した信念を帰すことになる(この点の詳細は注^{*15}

^{*14} 「現実^{*}に」という但し書きは無視しても理解の妨げにはならない(初読の際は無視した方が理解しやすいかもしれない)。

^{*15} 「自然で分かりやすい分析」は(a)と(b)と(c)を説明できない。この点は以下のように説明できる。まず(a)と(d)からピエールへ次の命題を対象とする信念が帰せられる。

「ロンドンが美しい」によって(現実^{*})表現される命題

この命題が真となる可能世界は、(e)によれば、次のような可能世界である。

「ロンドン」によって(現実^{*})指示される物が、「…は美しい」によって(現実^{*})表現される性質を有している可能世界

で説明する)。それゆえ、(a)と(b)と(c)がともに真でありうるのであれば、(d)と(e)と(f)のいずれかが偽でなければならない(ちなみに、先づきの言う、ルイスが最終的に棄却するのは(d)である)。

第三にルイスは「自然で分かりやすい分析」が、そもそも、容易に見出されうる欠陥をもつと指摘する。なぜならその分析は(a)という命題ひとつさえも説明できないからである(Lewis 1981: 412)。ルイス曰く、(a)を考察するだけで目下の分析の欠陥は判明する。その理屈は以下である。

(a)と(d)と(e)を仮定する(以下の議論で(f)は用いられない)。まず(a)と(d)からピエールへ次の命題を対象とする信念が帰せられる。

「ロンドンが美しい」によって(現実)に表現される命題

この命題が真となる可能世界は、(e)によれば、次のような可能世界である。

「ロンドン」によって(現実)に指示される物が、「…は美しい」によって(現実)に表現される性質を有している可能世界

ここで、「ロンドン」によって(現実)に指示される物はロンドンであり、「…は美しい」によって(現実)に表現される性質は《美しい》だとすると(ルイスはこの点を認める)、上の可能世界は次である。

ロンドンが《美しい》という性質をもつ可能世界

かくして次のように言える。すなわち、目下の分析が正しければ、(a)がピエールへ帰す信念の対象たる命題は、ロンドンが《美しい》という性質をもつ世界において真である、と。より正確かつ形式的に書けば次である。すなわち、目下の分析が正しければ、任意の世界 w について、もし(a)がピエールへ帰す信念の対象たる命題が w で真であるならば、 w ではロンドンが美しい、と。ルイスはこの点に文句を言う。ルイスによれば、ロンドンが美しくないような世界のうちにも、(a)がピエールへ帰す命題が真である世界がある。例えば、次段落で記述する世界がそれである(Lewis 1981: 412-413)。

この世界はきわめて最近まで私たちの世界とそっくりであった。この世界では、ブリストル(すなわち現実

ここで、「ロンドン」によって(現実)に指示される物はロンドンであり、「…は美しい」によって(現実)に表現される性質は《美しい》だとすると(ルイスはこの点を認める)、上の可能世界は次である。

ロンドンが《美しい》という性質をもつ可能世界

これが(a)によってピエールへ帰せられる信念の対象である命題が真となる世界である。同様の理屈によって、(b)によってピエールへ帰せられる信念の対象である命題が真となる世界は、次のようなものとなる。

ロンドンが《美しくない》という性質をもつ可能世界

ここから次のように言える。(a)が帰す命題と(b)が帰す命題がともに真となる可能世界は存在しない。それゆえ(a)と(b)は——(c)に反して——ピエールへ矛盾した信念を帰すことになる(ここで(f)が用いられる)。

で「ブリストル」と呼ばれる都市の、この世界での対応物)の美化が行なわれ、この街はオグドレッド・ロンダー卿の名前にちなんで「ロンダー」と改名されている。この世界においてフランス人はこの改名されたブリストルを「Londres」と呼ぶ。他方で、この世界では、ロンドンが荒廃し醜い街になる。そして、ロンドンで美しかった建造物のコピーがしばしばブリストルにつくられる。フランス人はブリストルの美しさについて語るが、これを聞き知ったピエールはフランス語で「Londres est jolie」と述べる。その後、ピエールは、「ロンダー」と呼ばれる都市ではなく、ロンドンの日本人街へたどりつく(後はクリプキのシナリオと同じである)。

ルイス曰く、「この世界はピエールの信念の完全に合致する」(Lewis 1981: 413)。すなわち、ピエールの信じることに限る限り、この世界はピエールの住む世界とそっくりである。実際、ルイスも言うように、「もしピエールにこの世界に関するすべてを教え、この世界が実際の世界である述べたとしても、彼はけっして驚かないであろう」(Lewis 1981: 413)——驚くとすれば、むしろ、自分の信念があまりに正しいことだけである。しかしながら文「ロンドンが美しい」はこの世界で偽である。たしかに、フランス人が「Londres」と呼ぶ街はこの世界でも美しいが、それはブリストルである。そしてロンドンは、この世界では、醜い。かくしてルイスは次のように結論する。すなわち、ピエールの信念に完全に一致する世界であるが、それでも(a)における「ロンドンが美しい」によって(現実)に表現される命題が偽となる世界が存在する、と。

以上の事例は(d)と(e)と(f)による信念の分析のどこかに欠陥があることを示唆する。なぜなら——すでに述べたように——この分析は《(a)がピエールへ帰す信念の対象たる命題が真である世界が、ロンドンが美しい世界であること》を帰結するからである。他方で、注^{*16}で挙げる理由から、ルイスは(e)と(f)には問題点を見出さない。かくしてルイスは(d)を棄却する。

このようにルイスは、(d)を退けることによって、「自然で分かりやすい分析」を否認する。(d)をもう一度掲げておこう。

(d)「A」を通常の固有名、「F」を述語とすると、文「ピエールは F(A)と信じる」はピエールへ「F(A)」によって(現実)に表現される命題を対象とする信念を帰属する。

この原理の否定は次を帰結する。「〇〇氏は……と信じる」の「……」は、一般に、信念主体の信念内容を表現しない。それゆえ(a)と(b)はピエールへ矛盾した信念——すなわち《ロンドンが美しい》という内容の信念と《ロンドンは美しくない》というそれ——を帰すように見えるが、それは文面に惑わされているだけである。実際、(d)を棄却すれば、(a)と(b)は必ずしもピエールへ矛盾した信念を帰すものでなくなる。

では(a)はピエールへどのような内容の信念を帰すのか。ルイスはこの点も手短かに論じている。鍵概念は「役割 role」である(Lewis 1981: 413-414)。ルイスによれば、《ロンドンが美しい》というピエールの信念にかかわっているものは、「ピエールにとっての[フランスでの]ロンドン役割を演じるもの」である。そして、

^{*16} 第一に、《(a)がピエールへ帰す信念の対象たる命題が真である世界が、ロンドンが美しい世界であること》を帰結する論証は(f)を用いなかった——それゆえ(f)は棄却される候補からはずれる。第二に、曰く、(e)には「非難する根拠が見出されない」(Lewis 1981: 413)。ルイスは踏み込んだ理由を述べていないが、おそらく(d)が「信念」という実質的概念にかかわるのに対して、(e)はより実質の少ない論理的原理であるということだろう。

何がこれを演じるかは世界に応じて変わりうる——ロンドンでもありうるが、ロンドン以外のものも演じうる。例えば、先の事例では、ブリストルがこの「ロンドン役割」を演じている(この「役割」に関する議論は Lewis 1986 においてより洗練した形で提示される)。

ルイスの解決は次のようにまとめられる。「ピエールはロンドンが美しいと信じている」と「ピエールはロンドンが美しくないと思信じている」はピエールへ矛盾した信念を帰すように見える。しかし、信念文脈に埋め込まれた文的表現が文字どおりの命題を表現しないことを認めるならば、これら二文はピエールへ矛盾を帰すとは限らない。そして——ルイスはこの点を主張したのだが——信念文脈の表現を文字どおり解釈する「自然で分かりやすい分析」を棄却する理由は存在するのである。

4.4 サーモンの見解

サーモンの解決案については手短に済ませたい。彼は、「信念」概念へ独自の分析を与えることによって、《合理的なひと矛盾を信じる》という点を擁護する。この点が認められれば、ピエールの状況はパズル的でなくなる。

サーモンは信念を、信念主体と命題との二項関係ではなく、信念主体と命題と他の何かとの三項関係であると主張する。この「他の何か」とは、周知のとおり、「見知り様式 mode of acquaintance」あるいは「ガイズ guise」である (Salmon 1986: 109)。「見知り様式」とは信念主体が命題を把握する仕方を意味する。そして——この点が興味深いところだが——サーモンは信念を見知り様式に関する存在量化として分析する。その分析は以下である。

まずひとAと命題pを固定する。この場合、Aがpを把握する際の見知り様式 x_1, x_2, \dots は複数存在しうる。ここでサーモンは「信じる」を次のように定義する (Salmon 1986: 111)。

A は p と信じる.

$\Leftrightarrow (\exists x) [A \text{ は } x \text{ によって } p \text{ を把握する} \ \& \ \text{BEL}(A, p, x)]$

ちなみに——いささか蛇足的だが——着目すべき点のひとつは次である。見知り様式 x_1, x_2, \dots は複数存在しうるので、例えばAは x_1 を通じてpを信じつつ、 x_2 を通じてはpを信じない、ということがありうる。この場合、次の事態が生じる。

$(\exists x) [A \text{ は } x \text{ によって } p \text{ を把握する} \ \& \ \text{BEL}(A, p, x)]$

$\& (\exists x) [A \text{ は } x \text{ によって } p \text{ を把握する} \ \& \ \neg \text{BEL}(A, p, x)]$

もちろん、この事態はいかなる矛盾も含まない(サーモンは後者の連言肢を「差し控える withdraw」と名づける)。

以上の道具立てでサーモンはピエールの事例^{*17}を分析する(Salmon 1986:129-132)。サーモンによればピエールは矛盾する命題を異なる見知り様式で把握している。すなわち、《ロンドン美しい》という命題をフランスでの見知り様式で、《ロンドン美しい》という命題をロンドンでの「直接的な」見知り様式で、把握している。かくして事態は次のように分析される(分かりやすさのため、英語で表現する)。

($\exists x$) [Pierre grasps that *London is pretty* by means of x & BEL(Pierre, that *London is pretty*, x)]

& ($\exists x$) [Pierre grasps that *London is not pretty* by means of x & BEL(Pierre, that *London is not pretty*, x)]

この事態は、曰く、ピエールの論理的欠陥を帰結しない。なぜなら、たしかにピエールは相矛盾するふたつの命題を信じているのであるが、それらを把握する仕方が異なるからである。こうした事態はピエールが完全に合理的であることと両立する。

サーモンの解決は次である。すなわち、命題を把握する仕方というファクターを導入することによって、矛盾した命題を信じるのが不合理性を帰結しないようにする、と。

最後にルイスの見解とサーモンのその違いに触れておきたい。ふたりの立場には類似点がある(例えば、ルイスの「役割」概念は個体に関するガイズと見なすことができる——サーモンのガイズは命題に関するものであるが)。他方で、違いもある。ルイスの解決によれば、ピエールは矛盾した命題を信じていない(なぜなら信念文脈に埋め込まれた文的表現は文字どおりの仕方で解釈されないのだ)。他方で、サーモンによれば、ピエールは矛盾した命題を信じている。

4.5 ドネランの見解

ドネランは——私見ではあるが、きわめて興味深い仕方で——クリプキの立場を擁護する。彼は信念のパズルがより一般的な問題の^{いち}ヴァージョンであると主張する。その問題とはテセウスの船に代表される「同一性のパズル」^{*18}である(Donnellan 1990: 211)。ドネランは、この主張に際して、重要な指摘をひとつ行なう。以下、はじめにその指摘を瞥見し、その後で彼の主張を確認しよう(ドネランによるクリプキ擁護については最後に触れる)。

ドネランの重要な指摘は次である。すなわち、信念のパズルの発生には「言語的な」原理は本質的に関係していないのではないかと(Donnellan 1990: 208-209)。より明確に言えば、信念のパズルには引用解除原理も翻訳原理も本質的に関係していない、と。例えば、古代バビロニア人に関して、私たちは、彼らが置かれていた状況に鑑みて、「古代バビロニア人はフォスフォラスがヘスペラスではないと信じていた」と言う。ドネランによれば、こうした信念帰属は引用解除や翻訳にもとづくものではない。むしろ、こうした信念帰属はある種の「直感」にもとづく^{*19}。そして、曰く、「この直感は、〈あるひとが問題の状況で何を信じ

^{*17} サーモン自身はエルマーという人物を論じているが。

^{*18} ドネラン自身が「同一性のパズル puzzle about identity」という語を用いる(おそらく、「持続と同一性のパズル」などの言い方がより正確だろう)。

^{*19} ドネラン自身が「直感 intuition」という言葉を用いている(ちなみに、先のマーカスの「直感」は彼女の主張の根拠とし

るか)に関するわれわれの判断に依存しているのであって、クリプキの諸原理には依存しない」(Donnellan 1990: 209 山括弧は引用者による)。実際——私自身の見解を補えば——私たちはしばしば、同意などの言語的振る舞いが見られない場合にも、「 $\times \times$ は……と信じている」と述べることもある(例えば、動物へ信念を帰す場合がそうであろう)。かくしてドネランは次のように指摘する。すなわち、信念のパズルは、同意や指示などの言語的ファクターを本質的に巻き込むものでなく、もっぱら信念のパズルなのである、と。

以上の指摘は信念のパズルの再考を迫る。なぜなら信念のパズルは、従来、固有名の指示と意味にかかわるものと見なされてきたからである(そして——第1節で叙述したように——これがパズルの実際の歴史的バックグラウンドであった)。もし従来どおり信念のパズルを〈ミル主義対フレーゲ主義〉という図式で理解するならば、このときには私たちはパズルの言語的側面に着目することになる。しかしドネランは、前段落で指摘したように、信念のパズルが本質的に言語とかかわることを否定する。そして、この点をふまえて、パズルを再定式化する。その再定式化は以下である。

ドネランによれば信念のパズルは次の一般的形式をもつ哲学的問題のヴァージョンのひとつである(Donnellan 1990: 211-212)。ふたつの事態 A と B がある。A と B は互いに独立な事態である。ここで A によって命題 p が真となり、かつ B によって p と両立しない命題が真となる。かくしてパズルが生じる。

曰く、テセウスの船はこの種のパズルである(Donnellan 1990: 211)。「テセウセアス」という名の船がある。この船の船板が徐々に交換されていく。古い船板はどこかへやられ、新しい船板が補われる。そして、もとの船板がすべてなくなり、いまや新しい船板をもつ船 S1 が存在する。以上の事態を A とする。ここで A は次の命題を真にすると思われる。《S1 がテセウセアスである》。他方で、別の状況を考えよう。先と同様に「テセウセアス」という船がある。この船の船板が徐々にはがされていく。新しい船板は補われない。最終的に、テセウセアスはバラバラになった。だが、このバラバラの船板から、あるひとがもとの船を復元した。最終的に、もとのテセウセアスと同じ素材と構造をもつ船 S2 が存在する。以上の事態を B とする。ここで B は次の命題を真にすると思われる。《S2 がテセウセアスである》。さて A と B は独立である。すなわちそれらは、別々に生じることも可能だが、同時に生じることも可能である。A と B が同時に生じた場合はどうなるか(すなわち、船板をはずす際、新しい船板を補いつつ、はがした船板でもとの船を復元する場合、である)。この場合、《S1 がテセウセアスである》と《S2 がテセウセアスである》がともに真になりそうである——S1 と S2 は区別されるにもかかわらず。これはパズルである。

ドネランは信念のパズルも同じ種類に属すと言う(Donnellan 1990: 210-211)。曰く、ピエールの事例はふたつの部分的ストーリーを有する。ひとつはフランスにおけるピエールについてのものであり(これを A とする)、他方はロンドンにおけるそれである(これを B とする)。ここで A と B は互いに矛盾する結論を保証する。それゆえパズルが生じる。

ここでドネランは以下の点を強調する。ピエールの事例においても A と B は互いに独立である。一方で、B なしに A は生じた——この場合には「ピエールはロンドンが美しいと信じる」は文句なしに真であった

て用いられていたが、ドネランの「直感」はそうしたものではない——彼は問題の状況においてある種の直感が働いていることを記述しているだけである)。

だろう^{*20}。他方で、A なしに B も生じえた——この場合には「ピエールはロンドンが美しくないと感じる」は文句なしに真であっただろう。どちらの部分ストーリーも、それ単独では、対応する信念帰属を十分に可能にする。問題が起こるのはふたつが組み合わされる場合である。この場合、次の問いが生じる。はたしてピエールはロンドンが美しいと感じているのか、いないのか。

以上がドネランによるパズルの再定式化である。彼はここから以下の含意を引き出す (Donnellan 1990: 213)。まず、以上の再定式化はパズルが、固有名の指示や意味ではなく、もっぱら信念の本性および信念にまつわる私たちの直感にかかわるパズルであることを示唆する。加えて、以上の再定式化はクリプキの議論を援護する。クリプキの目標は、ミル主義に対する「信念」概念を用いた批判からミル主義を守ることであった。ここで、もし——ドネランの言うように——信念をめぐるパズルの状況がもっぱら「信念」概念だけから生じるのであれば、ジョーンズの事例によるミル主義批判の鋭さは大幅に鈍らされるであろう (なぜなら目下のパズルの状況は固有名の指示や意味とかかわらないので)。

他方でドネランはパズルの積極的解決を提示しない (この点もクリプキと同じ「路線」である)。彼も「私はこの問いへの答えが分からない」と言う (Donnellan 1990: 214 傍点強調は原著者による)。ただし、ドネランが正しいければ、「この問い」とはもはや固有名の指示と意味に関する問いではない。固有名に関する「新しい指示理論」はこの問いへ答える責任を負わない。なぜならそれはもっぱら信念の本性に関する問いだからである。

5 パズルの解決と通常の信念帰属実践

前節では四つの解決案 (およびドネランの立場) を見た。それぞれの要点を振り返ろう。まず、パズルはもっぱら次の三文にかかわる。

- (8) ピエールは合理的な人物である。
- (10) ピエールはロンドンが美しいと感じる。
- (11) ピエールはロンドンが美しくないと感じる。

ここで、各々の解決案の主張は次である。

- ◇ マーカスは引用解除原理を修正する。すなわち、不可能な事態を表現する文への同意には引用解除は適用できない、と。この場合、ピエールによる同意から (10) と (11) を引き出すことはできなくなる。
- ◇ オーヴァーは翻訳原理の適用を制限する。すなわち、ピエールによる「Londres」の使用は「ロンドン」

^{*20} ここで——この点はきわめて重要だが——先のドネランの指摘に従えば、目下の信念文を引き出す際に、引用解除原理や翻訳原理は用いられない。曰く、私たちは A のシナリオから直感的に「ピエールはロンドンが美しくないと感じる」を引き出す。それゆえ、この「テセウス型」信念のパズルは、言語的原理を巻き込まず、もっぱら信念にかかわるパズルであることになる。

へ翻訳可能でない、と。この場合、ピエールによるフランス語使用から(10)を引き出すことができなくなる。

- ◇ ルイスは信念文脈の単純な解釈を棄却する。すなわち、「〇〇氏は……と信じる」の「……」は、一般に、信念主体の信念内容を表現しない、と。この場合、(10)と(11)は必ずしもピエールへ矛盾した信念を帰すものでなくなる。
- ◇ サーモンは「信念」概念の新たな分析を提案する。すなわち、信念とは命題を見知る様式に関する存在量化である、と。この場合、たしかに(10)と(11)はピエールへ矛盾した内容の信念を帰すが、このことはピエールの合理性を必ずしも損なわない(なぜなら《合理的なひと異なる見知り様式によって矛盾した事態を信じる》と言われうるのだ)。

どの解決案も巧みにパズルを「解決」しているように見える。すなわち、どの立場を採っても、パズルの状況は回避されうる、と言える。とはいえ——これが本節において私が指摘したい点だが——どの解決案もクリプキを満足させないと思われる。なぜなら、クリプキによれば、どの解決案も通常の信念帰属実践と折り合わないからである(以下、「信念帰属実践」は単純に「信念実践 *belief practice*」と書く)。本節では、彼のこの主張をクリプキ自身のテキストによってサポートしたい^{*21}。

本節の議論は以下の順序で進む。まず、上で挙げた解決案それぞれのどの点にクリプキが満足しないかを指摘する(ここでの鍵概念は——冒頭および第2節で予告したが——「通常性 *normality*」である)。その後で、一般的な指摘を行ないたい。その指摘は《クリプキが信念のパズルをそもそもどのようなパズルと見なしていたのか》にかかわる。

(本節の以下の部分において私はクリプキへ好意的な文体で議論する。これは、クリプキから一步退いた視点で語る際の煩瑣さを避けるためである。とはいえ——本稿の冒頭で予告したように——私はクリプキの議論が最終的には妥当でないと考えている。)

まずオーヴァーの解決案から始めたい。オーヴァーはピエールによる「*Londres*」の使用が「ロンドン」へ翻訳可能でないと主張した。こうした提案に対してクリプキは、先回りの、予防線をはっている。その議論は以下である。

第一にクリプキは次の点を確認する。「われわれは、通常^{*22}、フランス人が[…]*‘Londres’*をロンドンの名前として用いているかを判断するために、一定の基準を用いるが、こうした基準がどのようなものであれ、ピエールはそれを満足していると仮定する」(Kripke 1979: 255)。加えて、クリプキは次の点も指摘する。

^{*21} クリプキは——本文の以下の箇所で見ると——オリジナルの論文(すなわち Kripke 1979)において、パズルへの可能な解決案のいくつかをあらかじめ批判する議論を周到に組み立てている(この議論が、本稿冒頭で「周到なロジック」と呼んだものである)。これまでの論者はこの周到な議論を十分に考慮していない。それゆえ、オリジナルの論文以降に提示された解決案に対しても、この論文で準備された批判が適用されうることになる。「信念のパズルの解決案を提示しようとする論者は、まずは、この周到な議論を十分に考慮すべし」というのが、本稿の強調したい点のひとつである。

^{*22} 原語は「*usually*」であるが、「*normally*」などに類する意味で用いられていると思われる。

「Londres」から「ロンドン」への翻訳は「標準的なものであり、学生たちはこれを他の標準的な仏日翻訳^{*23}とともに学ぶのである」(Kripke 1979: 263)。ここからクリプキは次のように指摘する。ピエールの「Londres」を「ロンドン」へ翻訳してはならないという主張は「その場しのぎ expediment」にすぎず「見込みはない」(Kripke 1979: 263)。

第二に、以上の指摘を踏まえたうえで、クリプキは——百歩譲って——翻訳の制限の可能性を検討する。すると、問題は《どのような場合に固有名は翻訳可能でないのか》である。この点についてオーヴァーは「個人方言」に言及した。すなわち、ピエールの言語は特殊な個人方言である——そして、こうした特殊な個人方言に関しては通常の翻訳マニュアルは適用できない、と。クリプキはこの方針の問題性も指摘する。まず、個人方言の間の翻訳可能性の条件はおそらく次である。すなわち、それぞれの個人方言の話し手がそれぞれの名前に同じ一意的同定記述を結びつけている場合、そしてこの場合のみである、と。だが、曰く、こうした条件は「翻訳および間接話法に関するわれわれの通常の実践と明らかに適合しない」(Kripke 1979: 263)。実際、こうした条件が正しければ、例えば私とジョーンズが問題の名前へ同一の記述を結びつけている場合にのみ、私は「ジョーンズはキケロがはげであったが、タリーはそうでなかったと信じている」と言いうることになる。このことは問題をはらむ。例えば、目下の文をジョーンズの矛盾した信念の指摘として用いることができなくなるかもしれない。以上の考察は次のことを示唆する。すなわち、固有名の翻訳可能性の条件を記述の同一性で定める試みは通常の実践と齟齬をきたす、と。

では——第三に——固有名がそもそも翻訳可能でない場合はどうか。クリプキはこのオプションも検討している。この考えによれば、翻訳の際には、名前はもとの言語のかたちをとどめる。例えば、‘Pierre croit que Londres est jolie’の翻訳は「ピエールは Londres が美しいと信じる」となる^{*24}。これはいわゆる「混合言語」を用いるという立場につながる(これもオーヴァーの提案のひとつであった)。まずクリプキはこの提案を「きわめてドラスティックだ」と評価する(Kripke 1979: 263)。そして、次のような疑問を呈する。「一体、名前を含む文のどのような点がそれを内在的に翻訳不可能にしているか」(Kripke 1979: 264)。固有名の翻訳不可能性を主張する者はこの点を明らかにする必要がある。加えて、《名前を含む信念文を翻訳する際には、混合言語を用いなければならない》という帰結は「われわれの通常の実践に反する」(Kripke 1979: 264)。クリプキはこの帰結が「それ自体としてきわめてもつともらしくない」とさえ言う。さらにクリプキは次の指摘も行なう。すなわち、固有名が翻訳可能である場合には、例えば、自然種名も翻訳可能でなくなるかもしれない^{*25}、と(Kripke 1979: 264-265)。実際、「ウサギ」と「lapin」に関してピエールのような状況を構成することは可能だと思われる(例えば、あるひとが「ウサギ」と「lapin」を学ぶとき、異なる実例を見て、それらが似ているが異なる種に属すと判断する場合、など)。しかし、クリプキ曰く、自然種名に関する翻訳不可能性は「あまりにドラスティック」である(Kripke 1979: 265)。それゆえ、こうした帰結を生み出しかねないオプション——固有名は翻訳可能でないという立場——は避けられるべきである。

このように、クリプキによれば、ピエールの事例において翻訳原理の適用を制限することはさまざまな難

^{*23} 原文ではもちろん「仏英翻訳」である。

^{*24} 厳密に言えば「Pierre」という名前も翻訳可能でない。

^{*25} この点は、「名指しと必然性」で指摘された、固有名と自然種名の並行関係から帰結する(Kripke 1979: 264)。

点をはらむ。クリプキの議論の要点は次であろう。すなわち、ピエールの事例は、通常の基準では、翻訳原理が適用可能なものと理解されうる、と。それゆえ、ピエールの事例においてその適用を禁じることは、通常とは異なる基準をもちこむことになる、と。

同様のことがその他の解決案についても指摘しうるとクリプキは主張する——と思われる。例えばマーカスは引用解除原理の修正を提案した。曰く、不可能なことは信じられえない。それゆえ、矛盾した内容をもつ文への同意には引用解除が施されえない。クリプキはこの修正案そのものを吟味していない。しかし彼の応答は予想できる。それは、こうした修正も通常の実践に反する、というものである。以下、クリプキの可能的応答を構成してみたい。

マーカスの議論における決定的なステップは次であった。たとえ「ヘスペラスはフォスフォラスでない」へ同意するとしてもX氏は《ヘスペラスはフォスフォラスでない》を信じていない。なぜなら——以下が重要だが——ヘスペラスとフォスフォラスが同一である場合、仮にX氏が《ヘスペラスとフォスフォラスが同一でない》と信じていたとしたら、彼は《あるものがそれ自身と同一でない》と信じていたことになるが、このことは明らかに彼が信じていたことでないからである。この理屈へクリプキは反論しないと思われる（とりわけ賛成もしないと思われるが）。むしろ、仮にマーカスの言うとおりでしても、信念にまつわる問題は解消されない。理由は以下である。まず、通常の日本語話者であるX氏が文「ヘスペラスはフォスフォラスでない」へ熟慮のうえで誠実に同意するとしよう。すなわち、X氏は「ヘスペラス」と「フォスフォラス」のそれぞれを標準的な仕方方で用いつつ、目下の文の内容をしっかりと理解したうえで「ヘスペラスはフォスフォラスでない」と言うとしよう。この場合——マーカスの修正はどうあれ——通常の基準に従うと私たちは引用を解除して次のように述べる。すなわち、X氏はヘスペラスがフォスフォラスでない信じている、と。もちろんX氏に《a = a》を疑う意図はない——この点もクリプキは認めるだろう。しかし（繰り返し強調すれば）通常の基準に従うと私たちはX氏の同意へ引用解除を施し目下の信念文を得る。

要点は次のように表現できる。引用解除原理をどのように修正すれば、ピエールの事例における背理を回避できるか——クリプキにとっての問題はこれではない。むしろ、彼にとっての問題は、通常の信念実践において実際に彼の引用解除原理(D)が用いられていることにある。実際、私たちは引用解除原理を「もし目下の文が矛盾していなければ」などの制限なしに用いる。そして《こうした通常の原理が背理を生み出すこと》にこそ真のパズルは存在する。それゆえ原理を修正して背理を回避することはパズルの真の解決でない。

——おそらく以上がクリプキの応答である。彼がこのように述べるだろうことは、彼が実際に述べていることから推察できる。クリプキは、原理を制限したり修正したりする解決案——すなわちオーヴァーやマーカスの提案——について以下のような一般的批判を行なう。曰く、たしかに信念のパズルは引用解除原理や翻訳原理へ疑問を投げかける。そしてそれは、同意や信念や翻訳に関する新たな原理の定式化を迫るように思われる。しかし——クリプキはこの点を強調するが——単に整合的な定式化を提案するだけでは足りない。むしろ新たな原理は、矛盾を含まないことに加えて、「直感的に健全であり、かつ、われわれが通常行なう推論をサポートするもの」でなければならない(Kripke 1979: 259)。それゆえ原理の安易な修正や制限は完全な解決にならない。なぜならそれは私たちの通常の推論を禁じることにつながるから

である(実際、マーカスの提案に従うと、私たちは他者へ矛盾した信念を帰すことができなくなる)。

ルイスやサーモンに対してもクリプキは「通常性」を用いた反論を行なうと思われる。実際、クリプキは彼らに対してもこの種の予防線をはっている。

ルイスやサーモンの解決案はある種の「ガイズ」概念を用いて状況を再記述するものである。例えば、次の二文について

(10)ピエールはロンドンが美しいと信じる。

(11)ピエールはロンドンが美しくないと信じる。

ルイスは(10)を《ピエールは彼にとってのフランスでのロンドン役割を演じるものが美しいと信じる》と、そして(11)を《ピエールは彼にとってのイギリスでのロンドン役割を演じるものが美しくないと信じる》と再把握し、背理を回避する(ここでの「役割」はいわば個体ガイズと見なされうる)。またサーモンは(10)を《ピエールは、ある命題ガイズをとおして、ロンドンが美しいと信じる》と、(11)を《ピエールは、別のある命題ガイズをとおして、ロンドンが美しくないと信じる》と再分析し、背理を回避する。

しかし、クリプキによれば、こうした「別の用語法 *other terminology*」を用いて背理を避けることは何の解決にもならない(Kripke 1979: 259 傍点強調は原著者による)。クリプキは以下のように言う。「私は事態の完全でわかりやすい記述が可能であることに気づいている。そして、この意味では、いかなるパラドクスも存在しないことは十分に分かっている」(Kripke 1981: 259)。そうした記述のうちで最もわかりやすいもののひとつが、次であろう。

ピエールは彼が「Londres」と呼ぶ街が美しいと信じている。そしてピエールは彼が「ロンドン」と呼ぶ街が美しくないと信じている。(Kripke 1979: 259)

とはいえ——この点をクリプキは強調するが——このような「別の用語法」での記述を与えることはもともとの問いへ答えることに寄与しない。もともとの問いは次であった。すなわち、ピエールはロンドンが美しいと信じているのか、それとも信じていないのか。クリプキによれば、「ある別の用語法によって「関連するすべての事実」を述べることができると抗弁することは何の答えにもならない」のである(Kripke 1979: 259 傍点強調および鍵括弧は原著者による)。以上のことはルイスやサーモンの解決案にあてはまる。たとえ「ガイズ」概念を用いて事態を整合的に記述できたとしても、もともとの問いは残る。はたしてピエールはロンドンが美しいと信じているのか、いないのか。

クリプキの要点は次である。すなわち、目下の問いへは通常用語法で答えられなくてはならない、と。そして解決の困難はここに存するのである。曰く、「ピエールはロンドンが美しいと信じているのか、いないのか——信念帰属に関するわれわれの通常の基準をこの問いへ適用すれば、パラドクスと矛盾が生じることは明らかである」(Kripke 1979: 259 傍点強調は原著者による)。このように通常の信念実践にパラドクスの原因が孕まれているかもしれない点に問題の核心がある。そして、目下の問い——ピエールはロンド

ンが美しいと信じているか、いないのか——は、通常の信念実践において、十分に許容可能な問いである。それゆえ、「ピエールの状況を記述しなおして、彼はロンドンが美しいと信じているのかどうかという問いを回避するだけでは」真の解決には至らないのである (Kripke 1979: 259)。

以上が前節で紹介した解決案へのクリプキの応答(および私による可能的応答の構成)であった。ここから私は《クリプキが信念のパズルをそもそものようなパズルと見なしていたのか》に関するひとつの解釈が引き出されうると考える。

私の考えでは、クリプキは以下のように考えていた。「信念のパズル」の核心は次の点に存する。すなわち、通常の信念実践がパラドクスを生み出しかねないという点に、である。言い換えれば、信念にまつわる通常の用語法や通常の原理を用いれば不可避免的に背理が生じうるといふ点にパズルの核心は存する。そして、このことを示唆するのがピエールの事例(およびジョーンズの事例)である。クリプキの次の言葉は、以上の点を踏まえて理解されるべきだと思われる。

ジョーンズやピエールの事例で示される領域へ足を踏み入れるとき、われわれは、信念の解釈や信念帰属に関するわれわれの通常の実践が最高度の緊張にさらされ、ひょっとしたら崩壊してしまうような領域へ足を踏み入れているのである。(Kripke 1979: 269 傍点強調は引用者による)

それゆえ信念のパズルは次のようなパズルではない。すなわち、いかにしてミル主義は信念文脈における固有名の振る舞いを説明しうるか、と。むしろパズルは「信念」概念そのものにかかわる(この点を強調したドネランにクリプキは同意すると思われる)。信念のパズルとは《通常の信念実践が生み出しかねない背理へいかに対処するか》である。したがって、本稿の冒頭で示唆したように、信念のパズルは「固有名の指示」という問題系に収まらない^{*26}。このパズルはそれが提示された歴史的な文脈——ミル主義とフレーゲ主義の対立——を超えて出ている。クリプキの次の言葉はこの謂いであった。「信念のパズルは、哲学的パズルとして、自立的に存在しており、それが信念の問題に対してもつ根本的な^{インタレスト}関連性はそれを生み出した背景を超えているのである」(Kripke 1979: 239)。

——以上がクリプキによる「信念のパズル」の理解である。

他方で——いささか逆説的であるが——以上の指摘はクリプキによるミル主義擁護を強化しうる(この点もおそらくクリプキは主張するだろう)。その理屈は以下である。信念のパズルを提示したクリプキの歴史的な動機は、ミル主義に対する「信念」概念を用いた批判からミル主義を守ることであった。その批判とはジョーンズの事例である。だが、信念のパズルが示唆するように、「信念」概念そのものが危険な概念である。なぜなら私たちの通常の信念実践はそれ自体で背理を生み出しかねないものであるからである。すると、こうした危険な概念にもとづくジョーンズの事例から何らかの帰結——例えばミル主義の棄却——を引き出すこともまた軽率である。まず解かれるべきは「信念のパズル」である。そして私たちは、「信念」概

^{*26} 念のため強調しておく、これはあくまでクリプキによるパズルの理解である。それゆえ、この理解が正しいかどうかは別問題である(私自身も、《信念のパズルが固有名の指示という問題系に収まらない》というテーゼへ積極的にコミットするわけではない)。

念に対する納得のいく説明が与えられるまでは、ジョーンズの事例から固有名の指示と意味についていかなる帰結も引き出すべきでない。

では、信念のパズルへ納得のいく解決は与えられるだろうか。より正確に言えば、クリプキにとって納得のいく解決は与えられるだろうか。本節の最後に、この点へ触れたい。

私は第3節でパズルに対する従来の解決を鳥瞰した。たしかにどれも巧みに背理を回避しているように見える。とはいえそのどれもが、クリプキにとって、通常の実践に反する含意をもつ。例えば、ある解決は引用解除原理を制限あるいは否定し、また別の解決は翻訳原理を限定あるいは棄却する、などである。実際、例えば、クリミンズとペリーは次のように述べる。「信念報告についての私たちの説明においては、引用解除原理と翻訳原理のどちらも一般的には決してもっともらしいものでない」(Crimmins and Perry 1988: 707 傍点強調は引用者による)。たしかにクリプキは彼らの説明において引用解除原理と翻訳原理が成立しない点を認めるだろう。しかしクリプキにとっての問題は、繰り返し述べるように、それらの原理が実際に通常の実践で用いられている点にある。それゆえ、これらの原理に折り合わない解決案——すなわち従来の(おそらくすべての)解決案——はクリプキを満足させるものでない。それゆえ、クリプキにとってはいまだに「パズルはパズルである」(Kripke 1979: 239)。

かくして、信念のパズルをめぐる論争の対話的状況は以下のように表現できる。たしかにパズルに対する既存の解決案はどれも、もしそれが受け入れられるのであれば、「ピエール状況」が引き起こすとされる背理を回避する。だがクリプキは、どの解決案についても、「それは受け入れられない」と主張するためのいわば「切り札」を温存している。それは——もはや言うまでもないが——《それは通常的信念実践に反する》という切り札である。というわけで、パズルの解決案を提示した論者たちは、今やクリプキから次のボールを投げ返された状況にある。「あなたの解決案は通常的信念実践と一致しないので、受け入れることができない」と。

パズルの解決案を提示した論者たちは、どう応答すべきか。次節において私は、こうした論者たちに有利に働くようなひとつの提案を行ないたい。その提案は冒頭で予告した私の主張——クリプキの「通常性」概念には問題が含まれる——に基づくものである。

6 「通常性」の神話——「信念のパズル」はパズルでない

パズルの解決案を提示した論者たちに、私は次のように提案したい。それは、クリプキの「通常性」概念を問題視すればよい、というものである。この一手によって、論者たちはクリプキの「切り札」を無効化することができる。そして、実際にクリプキの「通常性」概念を問題視することは可能である——この点を本節では確認する。

私はクリプキに批判的である。たしかに、前節で再構成したクリプキの議論は周到であるように見える。とはいえ私は彼の言う「通常性」なるものがよく分からない。彼は、「通常性」という謎の最終審級によって、

既存の解決案を断罪するが、私はこの点で彼について行くことができなくなる^{*27}。

クリプキの議論は、ある点までは、明瞭に理解できる。この「ある点」とは、《彼にとって「通常」と感じられる信念実践が矛盾を引き起こす》という主張や《既存の解決案がどれも、彼にとって「通常」と感じられる信念実践に折り合わない》という主張である。とはいえ、さらに突っ込んで、次のように問いたくなる。第一に、クリプキにとって「通常」と感じられる信念実践とはどのようなものか。第二に、それは（「クリプキにとって」を消去して、端的に）「通常の信念実践」として一般化できるものなのか。第三に、仮に何らかの一般的な「通常の実践」があるとしても、それは哲学の最終審級たりうるほど堅固なものなのか。——どの点に関しても、彼の「通常」概念は問題をはらむ。

第一に、クリプキは自分がどのようなものを「通常」と見なすかを説明しない。彼は、「通常の信念実践」の内実を明示化せずに、これに類する語を自明なものとして用いる——まるで「通常の」人間であれば誰でもそれを理解できるかのように、である。

いくつか例を挙げておこう。前節でも引用したがクリプキは「われわれは、通常、フランス人が[…] ‘Londres’ をロンドンの名前として用いているかを判断するために、一定の基準を用いる」と言う。この際、彼は「通常」という語の意味を説明しない。

加えて彼は、「通常の日本語話者」を定義する際に、それは「文に現れるすべての語を標準的な仕方を用いて、それらの語を適切な文法規則に従って組み合わせるひと」(Kripke 1979: 249)だと述べるが、こうした定義もそれほど役に立たない。なぜなら定義項が「標準的な仕方」という不明瞭な概念へ依拠しているからである。さらに——前節で見たように——クリプキは「標準的な仏日翻訳」なるものの存在を前提しているが、ここでの「標準的」も説明されない。

私の第一の主張は次である。すなわち、クリプキの議論が依拠する「通常」や「標準的」などの表現は内実が不明である、と。加えて私は以下の点も強調したい。信念のパズルは研究者を惹きつける魅力と力強さをもつが、それらはまさにクリプキによる「通常性」概念の巧みな使用に由来する。クリプキは——本稿の第2節における説明から読み取られうるように——彼の議論の中にそれと分からぬ仕方で「通常性」への言及を忍ばせ、それによって読者を彼の「土俵」へ引き入れる。その基本的なロジックは、例えば、「通常のやり方だと……となる」である（こうした誘導は、クリプキほどの権威がそれとなく行なう際に、大きな効果を発揮すると思われる）。そして、引き入れられたが最後、その「土俵」に出口はない。なぜなら、その「土俵」の中では、パズルを解決することは「通常の」信念実践の原理に反することになるからである。

私は次のように提案したい。私たちは「土俵」へあがる必要はない、と。言い換えれば、「通常性」を用いたクリプキの議論に従う必要はない。それゆえ「通常の信念帰属実践がパズルを導出する」という彼の指摘にも全面的に同意する必要はない。なぜなら、彼の用いる「通常」や「標準的」などの語の内実が不明瞭であることに加えて、すぐ後で説明するように、そもそも「われわれの通常の実践」(Kripke 1979: 269)という表現は内実をもたないと思われるからである。

^{*27} ドネランの議論についても同様の批判を行なうことができる（少なくとも限定的には）。ドネランは信念帰属に関する私たちの「直感」がピエールの事例から背理を導き出すと考えた。もしドネランがこの「直感」を否定しがたいものと見なすならば、その限りにおいて、本論の以下のクリプキ批判はドネランにも適用されうる。

第二の点へ移ろう。私の考えでは、クリプキの言う「通常の実践」は、万人にとってのそれへ一般化されない。まず、「通常」の信念実践に関して、クリプキと異なるイメージをもつひとがいる（具体的にはマーカスなどがそうであろう）。こうした論者は、クリプキの見方がベターであることに説得されない限り、彼の議論へ従う必要はない。

加えて、通常の信念実践一般なるものが存在することを疑うひともいるだろう——私自身がこのタイプに属す。私の印象では、信念実践は多かれ少なかれ「場当たりの」である。言い換えれば、それは、固定した原理に従うものではなく、さしあたり妥当な記述を供給することを目指してプラグマティックな仕方で作動する。例えば、私がピエールのストーリーの前半のみを聞くとする。この際、私は「ピエールはロンドンが美しいと信じている」に同意するだろう。とはいえ、私がピエールのストーリーの全体を聞くなれば、私は自身の信念帰属を調整して次のように言う。例えば、ピエールは彼が「Londres」と呼ぶ街を美しいと信じ、彼が「ロンドン」と呼ぶ街を醜いと信じているが、彼はそれらが同じ街であることに気づいていない、と。私はこうした「場当たりの」調整に何ら問題点を見出さない。むしろ、私の見解では、信念実践が固定した原理に従うと考える方が問題である。

より具体的な論点は以下である。例えば、信念のパズルは翻訳原理を前提するが、この原理が一般的に認められうるかは怪しい。実際、クリプキの翻訳原理は「真理」概念を軸とするが、表現の機能的役割を重視する翻訳原理なども想定可能である（そして、周知のとおり、「真理」概念を軸としない意味論はまさに 20 世紀後半以降の分析哲学において広く追及されてきた）。この点に鑑みると、クリプキの翻訳観は過度に狭い可能性がある。したがって《翻訳実践とはどのようなものか》に関してクリプキに従う必要はない。なぜなら《翻訳とは何か》に関して異なる理解の仕方が存在するからである。

第三に——クリプキへ譲歩して——何らかの一般的な「通常の実践」が存在するとしよう。この場合、信念のパズルの解決がこの実践を絶対視すべきだということが帰結するだろうか。私は「必ずしも帰結しない」と考える。なぜならいわゆる「改訂主義的な revisionistic」立場も可能だからである。一般的に言えば、ある領域において「通常」の語り方や振る舞い方が存在するとしても、哲学的探究はそれをかならずしも特権視する必要はない。むしろ哲学は従来「通常」とされてきた考え方の改訂を提案することができる。実際、現代の少なからぬ自然主義的な哲学者は、さまざまな分野（とりわけ心の哲学や倫理学）において、この種の改訂を試みてきた。それゆえ、たとえ一般的な「通常の実践」が存在するとしても、信念実践に関する哲学的理論がそれを完全に尊重すべき理由はない。例えば、もしその「通常の実践」に矛盾が含まれるときには、それを修正した理論構築も可能であり、またそれが推奨されるのではないだろうか。

まとめよう。私は、第 5 節で、信念のパズルの中核に「通常性」概念が存することを指摘した。だが、まさにこのことのために、私は「信念のパズル」が真正なパズルでないと思う。なぜなら、クリプキの「通常性」概念の不明瞭さや非一般性によって、彼のパズルは万人が考察すべき問題の資格を欠くからである^{*28}。

^{*28} より一般的な話題へ手短かに触れておきたい。「通常性」を哲学の最終審級とするスタンスは「直感」や「常識」をそれとするスタンスと同類である。こうした立場は、例えば、ある見解から「直感に反する」あるいは「常識に反する」帰結が生み出されるとき、それをただちに帰謬法を形成するものと見なす（この種のロジックは近年の論考においてもしばしば

したがって、クリプキの土俵にのらず、彼の言う「通常の」信念実践なるものを重要視せずに、別のルートで固有名や信念に関する理論を構築すること——これが彼に対する適切な応答と思われる。具体的には、信念実践の理論を構築する際に、引用解除原理や翻訳原理を彼の規定するとおりに受け入れる必要はない、ということである。結局、私たちにとっては信念のパズルはパズルである必要がない。それゆえ、クリプキ自身は「信念に関するいかなる説明も最終的には、信念のパズルへ取り組まなければならない」(Kripke 1979: 239)と挑戦的に述べているが、彼の挑発にのる必要もない。

こうした主張が正しければ、信念のパズルの解決案の提案者は、「それは通常の信念実践に反する」というクリプキの反撃にひるむことなく、自分の解決案を押しとおすことができる。例えば、第4節で紹介したマーカス、オーヴァー、ルイスそしてサーモンの各々の解決案は、少なくとも「通常性」に依拠した反論によっては直接に棄却されない。もちろん、クリプキの反論が無効化されたならば、《では、既存の解決案のうち、どれが正しいものなのか》などが新たに問題になる。とはいえ——この点が本稿の最終的な主張なのだが——いずれにせよ「通常の信念実践」へ訴えるクリプキの反論は、既存の解決案を棄却する威力をもたない。

本節の議論は、もしそれが正しければ、論争の対話的状況を次の点まで動かすことになる。前節で述べたようにクリプキは、既存の解決案に各々について、「それは受け入れられない」と言うための「切り札」をもっていた。とはいえ、繰り返し述べるように、この「切り札」は有効性をもたない。それゆえ信念のパズルをめぐる論争の参加者は、今や、引用解除原理と翻訳原理を単純な仕方を含むクリプキの「通常の信念実践」のいわば「呪縛」から逃れて、《信念帰属はどのように行なわれるのか》をあらためて考察することができる。まだいろいろな課題が残っている。例えば、信念のパズルの関しては、《第3節と第4節で紹介された解決案のうちで、どれがベストなのか》や《まだ提案されていないベターな解決案はあるのか》などである。私自身も、引き続き、こうした問題を考察していきたい^{*29}。

最後にあらためて問おう。はたしてピエールはロンドンが美しいと信じているのか、いないのか。私はこう答えたい。この問いが生じる前提にはクリプキの概念構成がある。しかし私はそもそもその概念構成を受け入れない。そして、受け入れるべきでない³⁰と考える。他方で、ピエール状況を整合的に記述しうる概念構成を採用すれば、目下の問いは生じない。パズルの解決案の提案者がまずすべきは、パズルを引き起こす概念構成が通常のものであることや標準的なものであることを否定することである。

付記

見出される)。とはいえ——私はこう主張したいが——直感や常識に反することは矛盾していることは異なる。それゆえ、直感や常識に反することをそれだけで見解の否定の理由とするような理屈には、どこか論理的な飛躍が存するよう³¹に思われる。クリプキの「通常性」が哲学の絶対的な試金石でないのと同様に、直感や常識もその身分をもたないだろう。それゆえ「直感」概念や「常識」概念を軸とした議論は——それが抗しがたい説得性をもちうることは認めるが——少なくとも哲学においては差し控えた方がよいだろう。

^{*29} 私は山口 2009 で提案した私自身の解決案を好んでいるが、この点を正当化することは本稿の議論の範囲を超える。

本稿は、京都科学哲学コロキウム第 324 回例会での発表にもとづく。

謝辞

京都科学哲学コロキウム第 324 回例会において海田大輔氏、久木田水生氏、小山虎氏、副島猛氏から著者の立場への核心的な批判を頂いた。本稿の第 6 節はその際の議論から出来上がったものである。また、ふたりの匿名の査読者および担当編集者から、主張の明確化と表現の正確化のための適切な指示をいただいた。とりわけ、クリプキを本稿の仕方で批判することの意義は明示的に説明される必要がある、という指摘はきわめて重要であり、私の理解の浅さを痛感させるものであった。有益な諸々のご指摘に、ここで心より感謝の意を表したい。

参考文献

- [1] Anderson, C. A. and J. Owens (eds.), 1990: *Propositional Attitudes*, Stanford: CSLI.
- [2] Bach, K., 1997: “Do Belief Reports Report Beliefs?” *Pacific Philosophical Quarterly* 78, 215-241.
- [3] Brown, C., 1992: “Direct and Indirect Belief,” *Philosophy and Phenomenological Research* 52, 289-316.
- [4] Corlett, J. A., 1989: “Is Kripke’s Puzzle Really a Puzzle?” *Theoria* 55, 93-113.
- [5] Crimmins, M. and J. Perry, 1988: “The Prince and the Phone Booth: Reporting Puzzling Beliefs,” *Journal of Philosophy* 86, 685-711.
- [6] Devitt, M., 1990: “On Removing Puzzles about Belief Ascription,” *Pacific Philosophical Quarterly* 71, 165-181.
- [7] Donnellan, K., 1990: “Belief and Identity of Reference,” in Anderson and Owens 1990, 201-214.
- [8] Feit, N., 2001: “Rationality and Puzzling Beliefs,” *Philosophy and Phenomenological Research* 93, 29-55.
- [9] Fiengo, R. and R. May, 1998: “Names and Expressions,” *Journal of Philosophy* 95, 377-409.
- [10] Forbes, G., 1990: “The Indispensability of Sinn,” *Philosophical Review* 99, 535-563.
- [11] ———, 1994: “Donnellan on a Puzzle about Belief,” *Philosophical Studies* 73, 169-180.
- [12] Frances, B., 1998: “Defending Millian Theories,” *Mind* 107, 703-727.
- [13] Hanna, P., 2001: “Linguistic Competence and Kripke’s Puzzle,” *Philosophia* 28, 171-189.
- [14] Kallestrup, J., 2003: “Paradoxes about Belief,” *Australasian Journal of Philosophy* 81, 107-117.
- [15] Katz, J., 1994: “Names without Bearers,” *Philosophical Review* 103, 1-39.
- [16] Kripke, S., 1972: “Naming and Necessity,” in D. Davidson et al. (eds.), *Semantics of Natural Language*, Dordrecht, Reidel, 253-355. Reprinted in his *Naming and Necessity*, 1980, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.

- [17] ———, 1979: “A Puzzle about Belief,” in A. Margalit (ed.), *Meaning and Use*, Dordrecht: Reidel, 239-283.
- [18] Laurier, D., 1986: “Names and Beliefs: A Puzzle Lost,” *Philosophical Quarterly* 36, 37-49..
- [19] Lewis, D., 1981: “What Puzzling Pierre Does Not Believe,” *Australasian Journal of Philosophy* 59, 283-289, reprinted in Lewis 1999.
- [20] ———, 1986, *On the Plurality of Worlds*, Oxford: Blackwell.
- [21] ———, 1994, “Reduction of mind,” in S. Guttenplan (ed.), *A Companion to Philosophy of Mind*, Blackwell, reprinted in Lewis 1999.
- [22] ———, 1999, *Papers in Metaphysics and Epistemology*, Cambridge: Cambridge University Press.
- [23] Loar, B., 1987: “Names in Thought,” *Philosophical Studies* 51, 169-185.
- [24] ———, 1988: “Social Content and Psychological Content,” in R. Grimm et al. (eds.), *Contents of Thought*, Tucson: University of Arizona Press, 99-110.
- [25] Lumsden, D., 1984: “What Powers Kripke’s Puzzle?” *Pacific Philosophical Quarterly* 65, 189-194.
- [26] Lycan, W., 1988: *Judgment and Justification*, Cambridge, New York: Cambridge University Press.
- [27] Marcus, R., 1981: “A Proposed Solution to a Puzzle about Belief,” in P. French et al. (eds.), *Midwest Studies in Philosophy* 6, Minneapolis: University of Minnesota Press, 501-510.
- [28] ———, 1983: “Rationality and Believing the Impossible,” *Journal of Philosophy* 80, 321-338.
- [29] McMichael A., 1987: “Kripke’s Puzzle and Belief ‘under’ a Name,” *Canadian Journal of Philosophy* 17, 105-126.
- [30] Moore, J. G., “Misdisquotatation and Substitutivity: When Not to Infer Belief from Assent,” *Mind* 108, 335-365.
- [31] Over, D. E., 1983: “On Kripke’s Puzzle,” *Mind* 92, 254-256.
- [32] Owens, J., 1990: “Cognitive Access and Semantic Puzzle,” in Anderson and Owens 1990, 147-173.
- [33] Pettit, Ph., 1984: “Dissolving Kripke’s Puzzle about Belief,” *Ratio* 26, 181-194.
- [34] Powell, L., 2011: “How to Refrain from Answering Kripke’s Puzzle,” *Philosophical Studies*, 1-22.
- [35] Salmon, N., 1986: *Frege’s Puzzle*, Cambridge: MIT Press.
- [36] Santambrogio, M., 2002: “Belief and Translation,” *Journal of Philosophy* 99, 625-647.
- [37] Sosa, D., 1996: “The Import of the Puzzle about Belief,” *Philosophical Review* 105, 373-402.
- [38] Taschek, W., 1988: “Would a Fregean be Puzzled by Pierre,” *Mind* 97, 99-104.
- [39] ———, 1998: “On Ascribing Beliefs: Content in Context,” *Journal of Philosophy* 95, 323-53.
- [40] 山口尚 2009. 「信念と矛盾——クリプキの「信念のパズル」の解決」, 『人間存在論』 15: 53-64.

著者情報

山口 尚(大阪工業大学)